



TITLE:

京大広報 No. 72

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 72. 京大広報 1972, 72: 265-268

ISSUE DATE:

1972-04-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209622>

RIGHT:

京大広報

No. 72

京都大学広報委員会

入学宣誓式について

- 1 本年度学部入学宣誓式は、4月11日、総合体育館で行なわれた。

かねてから大学として暴力により事を律しようとする行為の容認できないことは再三明言されてきたところであるが、当日一部の学生による妨害があり、予定した式次第どおり実施できずに終了した。

式は、午前10時学歌斉唱で始まり、ついで「総長のことば」となったが、その途中正面入口から数十名の学生が式場内に乱入してきた。その一部は、演壇にかけ上り、総長を取り囲んでマイクを取り上げるなどして「総長のことば」を妨害した。壇上では、教職員とのもみ合いが始まり、また新入生や父兄の中から妨害をなじる声が上るなど式場は混乱し、これ以上式を続けることが極めて困難と認められる状態になった。そのため、やむなく同10時10分頃入学宣誓式終了の宣言がなされた。その後も一部学生の演壇占拠が続いたが、同10時30分頃から新入生および父兄の大多数は教職員の誘導により式場外に退出した。総長を取り囲んでいた学生は、同11時45分頃引き上げた。

- 2 学部入学宣誓式における「総長のことば」の全文は、次のとおりである。

総長のことば

昭和47年度の京都大学学部入学宣誓式を挙行するに当たり、来賓ならびに教職員各位の御列席を得ましたことを、新入生とともに御礼申し上げます。

入学試験の難関を突破して、わが京都大学に入学した 2544 名の諸君を心から歓迎しま

す。

諸君は入学に当って、大学は学問をするところであり、諸君は勉学のために入学したのであり、その勉学は自主的にやらねばならないということを心に刻んでいただきたいと存じます。わが京都大学は75年の歴史を持ち、社会の各方面で活躍する多くの人材を育成し、数多くの偉大な研究成果によって社会に寄与してまいりました。その伝統を受け継ぐ者として諸君は本学に入学してこられたのであります。新陳代謝しつつ歴史と共に築き上げられたわが京都大学は、勉学の場として誇るに足るものがあると信じます。これを十分に利用するもしないも、かかって諸君自身の心構えにあります。諸君は、灰色の生活といわれる受験準備の期間の後、合格の榮譽を得られた瞬間から、大きな解放感を味わっておられると思いますが、その解放は、強制されない自由で自主的な勉学への解放であって、決して勉学することからの解放であってはなりません。

本学は教職員・院生・学生を合わせて約2万人の集団であり、小さな都市の人口に匹敵しますが、このような多数の人間が、相互の生活を妨害せず、安心して勉学研究ができるためには秩序が必要であり、その秩序は大学構成員個々の良識と理性によって保たれなければなりません。大学は思索する人の集団であり、自分の主張を他に伝えるには理性的な話し合いによるべきでありまして、いかに自ら正しいと信じて、これを力で他に強制すべきではありません。大学には教育本来の精神から、多少の逸脱に対する寛容もあります

が、決してそれに甘える行動を取るべきではありません。

本学においては、この1月以来授業料値上げ反対を主題として、いくつかの学部で授業放棄が行なわれ、一部の学生により一部の建物が封鎖・占拠される事態が生じました。いわゆる封鎖・占拠は、大学における研究教育その他の業務に重大な支障をもたらすものであり、さらに自由な討論と集会の場を制約するものであって、もとより大学としてこれを容認できることではありません。封鎖・占拠していた諸君が自ら解除することを期待して努力いただきましたが効果はなく、そのような状態では入学試験もできないため、ついにやむをえず警察の警備の下で教職員の手で封鎖を解除いたしました。ひきつづいてとられた入学試験の時の異常な措置もまことにやむをえないものでありました。入学試験を実施することは、大学の社会的責任であり、静かに受験できる環境を確保することは、受験生に対する義務であります。これらのことは、その試験によって入学された諸君には十分理解できることと存じます。この間の教職員の苦労は大変なものがあり、なんとか無事に入学試験を終り、ここに諸君を迎えることのできたことは、特に感慨の深いものがあります。年度の最終日である3月31日までに、すべての学部で卒業生を送り出すことはできましたが、なお学年末試験の遅れているところや、授業放棄の続いているところもあり、バリケードなども見られるとおりで、諸君を迎え入れるにふさわしい状態とは言えません。しかし諸君の勉学への期待に答えるために、大学としてできるだけ努力をつづけてまいりますので、しばらくの間は諸君に不便をかけることになるかもしれませんが、諸君も事態を冷静に判断して行動していただきたいと思います。

健康を保ち、人間を練成し、青年の活力を発揚するために、体育やスポーツにも励んで下さい。この式場である総合体育館は、本学の創立70周年を記念するため、諸先輩の努力で建設寄付されたもので、諸君が心身を鍛錬して、社会のため有為な人材となるようにと

の願いをこめた先輩の贈りものであります。本年3月に竣工、式典に使用するのには諸君が最初であります。

諸君はいま、大学生活の出発に当って、勉学への意欲と未来への輝かしい展望を持っておられると思いますが、どうか今日の心を忘れず充実した学生生活を送られることを希望して、諸君の晴の日に贈ることばといたします。

昭和47年4月11日

京都大学総長 前田 敏 男

3 同日午後3時からの大学院入学宣誓式は、予定どおり行なわれた。

農学部水産学科、農学科の新館 移転について

3月13日から開始した水産学科および農学科の新館移転は18日に作業を終了したが、この間一部学生の激しい阻止行動があり、やむなく警察の出動を要請する措置をとった。

新館移転については、教職員および学生の理解と協力をうるべく学部においてもできるかぎりの努力を重ねてきたが、13日からの移転開始にあたり、一部学生の間に阻止の動きがみられたので、最小限の立入禁止区域を設定して作業に着手した。13、14日の両日、10数名の学生による激しい阻止行動にあい、作業不能の状態におちいった。また、14、15日の夜間には、何者かによって事務室付近に火焰びんが投げられるという事件が発生した。このような緊迫した事態のもとで運送会社からは作業続行を断わる旨の申入れがあり、両学科の教育研究活動への支障（水産学科の舞鶴よりの移転荷物の新館搬入は2月22日から始められたが、阻止のため中断状態であった。また、農学科の移転準備はすでに2月中旬にほぼ完了し、搬入待ちの状態であった。）はこれ以上黙視できないと判断される状況となった。そこで学部長は、移転業務を円滑に進めるため、総長に対し、必要な場合には警察の警備を求められたい旨申し入れ、総長はそのことにつき部局長会議および評議会の上を承えて、府警本部に対し、警備を依頼する措置を取った。3月16日水産学科の移転を開始したところ約10名の学生が激しい阻止行動に出、運送会社職員による作業を中止せしめるに至った。この

ような状態において、まず、学部長および総長の退去命令が発せられたが、なお混乱が続き、作業の続行が不可能と判断されるに至ったので、学部長より前記の措置に基づき警察の現場への出動が要請された。その際学生5名が逮捕される事態が発生した。引き続き17、18日の両日にわたり警察の警備のもとに移転業務が行なわれ、また16、17日の両日夜間の警官パトロールが行なわれた。18日に移転作業はほぼ完了した。

月 曜 会 メ モ

第102回 (4. 10) 司会 永田 忍会員

I 会員の交替 4月1日付け

法学部：高坂正堯会員から片岡 昇教授へ
経済学部：木原正雄会員から小野一郎教授へ
農学部：松田良一会員から中嶋千尋教授へ

II 各部局報告

(イ)文学部より 前年度卒業予定者は3月末までに卒業。新学期講義開始のため目下努力中の報告があった。(ロ)農学部より 新館移転はようやく終了し、旧館のとりこわしにかかることになった。また、卒業予定者は卒業できた旨の報告があった。(ハ)教養部より 前年度4回生で教養の単位が残っていた人には、学部からの依頼にもとづいて臨時試験を行なった。1回生の授業は12日から開始の予定。2回生については当面授業が行なえない。2、3回生の後期試験がまだ行なわれていないが、奨学金を打切られないためには日本育英会に6月末日までに成績を提出する必要がある、目下苦慮しているなどについて報告があった。(ニ)薬学部より 新4回生についてはスト継続中という報告があった。

III 話 題

(イ)最初に月曜会の運営の仕方について。前回、存続をきめた段階で、今後司会を前もってきめておいた方がよいかどうかについて検討。出席の促進などを考えて1年間前もってきめておき、都合が悪い場合は相互に調整することになった。来月からの順序は、ウイルス研、霊長研、教育学部、医学部、教養部、化研、人文研、結研、原子エネルギー研、木研、食研、防災研である。

(ロ)前回から予定された話題として「他大学間の授業科目の相互履修」について。最近、文部省令なども出されて、今後この方向が広がってゆくも

のと思われるが、一例として、京大大学院工学研究科と阪大大学院工学・基礎工学研究科との間に4月より行なわれることになった授業科目の相互履修について説明があった(内容は、工学部広報(速報)No. 34参照)。また、つづいて行なわれた質疑に対して次のような補足的な説明がなされた。①教官の身分的取扱いについて。大学相互間で大学院授業科目担当教官全員を一括非常勤講師(無給)として任用する。ただし、各教官あての異動通知書は省略し、人事記録にも記載しない。今回の相互履修の実施にあたって困難だったのは、教官の身分をどう扱うかであったが、文部省令が出たので今後この問題については解決しやすくなるのではないか。②博士課程においても修士課程においても、それぞれ特徴のある科目を選択して履修できるように自由度を広げたことが今回の措置の特徴である。③大学院学生が他大学の科目を履修する問題に関しては、数年前より八大学工学部長会議で議論がなされてきており、その後工学部内での独自の検討および大阪大学との間の検討協議を経て得られた成案により実施されるに至ったものである。工学部としては、この交流を通じて得られる今後の具体的成果を充分検討し、将来の大学院教育のより適切な方法を見出したいと考えている。

このほかに、文部省令では、学部の場合30単位を越えない範囲とし、外国留学の場合、準用することになっていることが新聞報道として伝えられた。

以上につづいて、このような方式を学部まで含めて実施する場合の問題点などについて意見を交換した。主なものとしては、全体としてこの制度の意義を評価しつつも、①事務的繁雑さ、趣旨を充分理解した相互履修が円滑に行なえるかなどの心配。②相手を選ぶ問題について。相互の合意が必要だが、それによって、大学間に一定のランクづけが発生するのではないか。また、私学との間では聴講料をとるとしても、一方へ集中することが起る可能性がある。ことに、教養課程で行なった場合には、試みとしては非常に面白いが、いわゆる「大」大学が他の大学の学生を吸収する場合が考えられ、小さな大学の方では教養課程はいらないということもありうるのではないか。現在でさえ大変な教養部の負担はその場合にはひどいことになる。あるいは、学生が季節的に移動すると

いうことも起るかもしれない。③学生がいろいろな便益（図書館利用など）を受けるのには制限をつけるのかどうか。一方、講義だけでなく、本来なら設備の利用、演習・ゼミナールなどに出れるのがよいのではないかという意見。④研究条件・スタッフの状況が悪いまま実施すると一層矛盾がひどくなるのではないか。などの意見が出された。

い今後、月曜会としてとりあげるテーマの検討。前回、テーマをきめて会を開いた方がよいという意見にもとづいたものであるが、今回も、月曜会の発足時の目的、現在の意義について質問がでたり、学部の出席が悪く、その点で会の意味が

減殺されるという指摘があったが、一方、各部局の実状を全学に伝えることはつねに必要であり、そのような場としての意義が強調された。とりあげるテーマについては、資料を準備してやるか、サロンの自由にやるかとか、各学部での諸制度の具体的比較検討、教養課程改善案調整委員会の具体案などについて議論が出されたが、必ずしも意見はまとまらず、当面問題になりそうなこととして、大検委第3部会の報告として出される予定の管理運営、総長選挙制度などをとりあげることとなった。

（永田 忍会員）